
俺と使用人の恋物語

冬桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と使用人の恋物語

【NZコード】

N9376E

【作者名】

冬桜

【あらすじ】

「ごく普通の男神谷竜と使用人の智栄の純恋愛」…この二人は最後にはどうなるのか？

第1話・初めての出会い

もう朝か…いつまでたっても朝は苦手だな。

俺の名前は神谷 竜

もう今は19歳になり、アルバイトや親の仕送りのおかげで一人暮らしをしている身だ。

俺はとりあえず玄関のドアに入れられている広告のチラシの束を手に取った。

ほとんどスーパーのセールの広告ばっかじやん。

「ん? 何だこれは?」

俺は一枚の広告が目に付いた。

貴方の家に使用人を派遣致します。

家事をするのが面倒なお方、家事をする暇がないお方など色々とあると思いますが…そんな貴方には家事など色々としてくれる使用人を派遣致します。

気になった方は下記までご連絡をお願いします。

「使用者か…」

確かに俺は家事するのはどうちらかと書つと面倒だ。

でも…その使用者は家に住み込むつてことだろ?

ま、俺には彼女もいなし気にすることないか

「じゃあ、使用人の派遣をお願いしてみようかな？」

俺は電話し派遣をお願いしたのだった…

そして2時間が経った頃にピーンポーン

インター ホンが鳴った。

ガチャ

「はい。どなたですか？」

「初めまして。今日から貴方の家で使用人として務めさせてもらひうことになった智栄です。」

「あつどいつも初めまして。俺は神谷です。」

智栄と名乗った子はすぐ可愛らしい顔しており背は低めであった。

「今日で初めてなんです。使用人として働くのは。」 「そ、うなんだ…あのさ…もしかしてその服でここまで来たの？」

俺は気になつてることを聞いた。

だつて…メイドの服みたいな感じの服なんだぜ？

「はい。だからこうしてここに面会するんですよ。」

そう笑顔で彼女は答えた。

「まついいか。とりあえず上がつて。」

彼女を家に上がらせた。

「へえー結構広い部屋こすんでるんですね」主人様

「」主人様ー！？ちょっと待つてよ。」

さすがに「主人様」と呼ばれのには抵抗もある…

「どうかなさいたんですか？」

彼女は可愛らしい顔で不思議な表情をさせていた。

「いや…そのなんていうか…他の呼び方にしても。」

「やつですね…じゃあ下のお前は何ですか？」

「竜だけど」

「じゃあこれからは竜さんって呼びますので。」

下の名前で呼ばれるのも恥ずかしげがさつきよつは全然マジだらう。

「あ…後私のことは智栄つて呼んで下さいね。」

下の名前で俺も呼ぶのかよ結構恥ずかしいな…

しかもこれからこんな可愛い子と一緒に住むことになるとはな…

「あのわ…智栄さん…」

俺がそう呼ぶと智栄さんはマツとした顔した。

「呼び捨てで呼んで下せこよ。」

「じゃあ智栄…これから部屋の案内とかさせて貰つからついて来て。

「

これが俺と智栄が初めて出会いた頃の話だ。

まさかこの出会いが俺の人生を大きく変えるとは俺も予想しなかった。

第2話・「これが恋心!-?」

「まあ、部屋の案内はこんなものかな?ひょると智栄の部屋もあるからな。」

さすがに俺の部屋で智栄と一緒にしてこのには無理があるしな…

俺はそんなつもりで智栄に来て貰つたのではない。家の家事とかをやって貰つためにだ。

「えー……とこ(ひ)とせ…竜さんと一緒に部屋でそして一緒に寝るんじゃあないんですか?」

「バカ!…当たり前だ!…そんなつもりはないからな

何を言い出すんだ急に…
物凄くびっくりしたよ本(ひ)

「分かりました…。」

ため息をつきながらがっかりした表情で智栄。
そんな顔されたら一体どうすればいいんだよ…?」

「そんな顔するなよ。とつあえず今は一緒に寝る」ことはないだけだから。」

「本当にですかー? よかつたー。」

俺がそいつと智栄は急に明るい表情になつ飛び上がりつぱつ語った。

本当に可愛らしくやつだ。
ところで年齢は一体いくつ何だろ? ちよつと聞いてみるか。

「なあ智栄。急に聞くけど歳はいくつだ?」

「歳ですか? 18ですよ」

「18歳! ?

俺より一つ年下じゃん。
でも全然18に見えないよな。

「18歳なんだ。見た目より若いんだな。」

俺は少しからかつてみた。

「もー竜さん! …」れでもピチピチの18ですよ。ふーんだ!」

智栄は頬を膨らませながらさう言つてゐた。
からかいがいのあるやつだな。

「冗談に決まつてゐだろ。簡単に信じるなよ。」

「そんなこと突然言われたら誰だつて信じちゃいますよ。」

いやいや簡単に信じるのは多分お前くらうだろ。

俺はふと時計を見た。
もう6時か……早いな。

「もう6時だな。そろそろ夕食の時間だ。俺が作るからちょっと待つてて。」

「待つて下さい。それは私の役目ですよ。竜さんが座つて待つてくれださい。ねつ？」

確かにそれは智栄の役目だよな
じゃあ智栄の言葉に甘えるとしますか。

「じゃあ、頼むよ。」

「はー。任せ下せー。」

智栄は得意気に皿をペロリと口にしてそう言った。

なんか初めてだよ。

家で座つてご飯を待つだなんて

智栄の料理をしていろ後ろ姿はあまりにも美しいものがあるよな。
結婚つてこんな感じなのかな?

つて俺は一体何を考えてるだ。

俺はそんなつもりはないんだから…

「イタツー」

俺が考え方をしていろと智栄がそつと葉を発した。

「どうした?」

「いたたつ…すみません。ちょっと包丁で指を切っちゃって、えへへ。」

智栄は笑つてそう言つていろが…結構指は切れているみたいだ。
血も結構出でている。

「ちよっと見せてみる。」

俺は智栄の手をとると

無意識に智栄の血が出ている指を口に加えていた。

「ちよ…ちよっと竜さん…恥ずかしいですよ。私は大丈夫ですから。

」

智栄は少し恥ずかしそうに言ひ。

はつーー

俺は一体何をしているんだ?

俺自身も恥ずかしくなってきたよ!うだ。

「う…うめん。ただ放つて置けなくて。」

自分でも顔が赤くなっているのがよく分かる。

「竜さん…私…ものすごく嬉しいですよ。ここまでして貰えて…本当に嬉しいです。」

智栄は一「う」と笑つてそう言つてみせた。

あれ？

さつきから俺の心臓が激しく動いてるといつか…

何かこうドキドキしていいる感じだ。

一体この気持ちは何なんだよ？

まさか！？

いやいや絶対にそれはないんだよ。

絶対にあるはずがない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9376e/>

俺と使用人の恋物語

2010年12月14日17時37分発行